

長唄の世界へようこそ 読んで味わう、長唄入門

細谷 朋子（著）（2014年3月、春風社）

表現文化学科 東 聖子

日本近世芸能の粹である長唄の、概要と作品（一五
条一六曲）を紹介し、その魅力の在処を述べた珠玉の
入門書である。本書の構成は以下のごとくである。

はじめに／長唄の扉／曲目解説（十五条）／長唄を
聴きに行こう／参考文献／あとがき

『日本古典文学大辞典』によれば、「江戸長唄」の【沿革】は、(一)発生期(二)形成時代（宝暦・明和期）(三)大成時代（安永・天明期）(四)黄金時代（文化～安政期）(五)明治以後である。【特色】は能・狂言・地歌・民謡・流行歌、また各種の浄瑠璃の題材・曲節・技法をとり入れた結果、多種多様な面を備えるにいたった。演奏は一挺一枚（唄一人、三味線一人）の最小単位から、多人数や、さらに囃子を加える演奏もある。内容・曲節ともに比較的上品な曲が多いと解説がある〔竹内道敬〕。

本書刊行の約三か月後の『演劇界』（二〇一四年六月号）では、〈今月のおすすめ〉欄に渡辺保氏の著書とともに、次のように紹介されている。

和歌や俳諧の修辭、江戸の地誌、遊里文化、洒落や俗謡、明治の新語に至るまで、多岐にわたる文化・文芸が唄い込まれている長唄。「越後獅子」「鷺娘」「吉原雀」「勸進帳」など、歌舞伎ファンにはお馴染みの十五曲を取り上げ、その成立や歌詞の現代語訳、語句解釈でわかりやすく解説する。

この他『邦楽ジャーナル』五月号に書評が載り、また「日本図書館協会選定図書」として注目された。

さて、本書の構成にしたがって内容を眺める。

〈はじめに〉にあるように、著者のスタンスは、若手の研究者であり、二十代後半から趣味で三味線の稽古に励む弟子、また元国語教師という三つの立場であり、本書にはこれらが功を奏している。

本書執筆の原動力は、「難解なのに、心をとらえて離さない魅惑的な文章なのはなぜ」という問いであり、歌詞の「余白」を埋める通釈を試みる。また、長唄研究への提言として、難解な専門書のみではなく、歌詞の読解などのわかりやすい一般書が必要だという。日

本文学研究全般においても研究が細分化し高度化して、社会への還元がしにくい。

〈長唄の扉〉には、概説的に三つの解説がある。第一に音楽や演奏の形式について、第二に歴史について、第三に歌詞を構成する要素についてである。歴史の部分で、江戸から明治へ移行する時期に演劇改良運動の影響をうけて、歌詞改定により近代化を実現して生き残っていく遅しさは、興味深いものがあった。

また、日本の伝統的な古典芸能においては、能の詞章を「錦のつづれ」というように、過去の古典や韻文学のさまざまな詞章を素材としている。

日本文学は悠久の時間の中で、名文を再生産する構造を持っていたと感じる。そして、個人的な近世俳論研究の立場からは、和歌・連歌・俳諧・歌謡等という日本文学の大きな流れの中で、長唄はどう独自に、四季の詞、名所、恋の詞、景物などを形象化しているのか、そのジャンルとしての独自性の解明に興味がある。

〈曲目解説〉は、解説・本文・訳・語句解釈と続き、長唄の歌詞がたっぷりした優雅な字体でよい。

また、研究ノートには自在な豆知識の展開がある。紙面の関係で多くを述べないが、この解説が本書の中核をなす、曲目を楽しむ味わい深い部分だ。

さらに本書を鑑賞しながら、研究のヒントにも出会える。たとえば「吉原雀」の鳥づくし・草花づくしのなもの、俳書にもある。

実に花ならば初桜 月ならば十三夜
いづれ劣らぬ粋同士の あなたへ云ひ抜け
こなたのだて いづれ丸か候かしく

本書により段々と長唄の魅力にとりつかれてゆく。

〈長唄を聴きに行こう〉〈あとがき〉はHPも紹介する。本書は松永鉄九郎師匠と渡辺憲司立教大学名誉教授の薫陶によるものだ。多くの方々にお勧めする。

尚、本学図書館にて、1月より十文字学園女子大学学術図書出版助成図書を展示中である。